

中世王朝物語『風に紅葉』における女御の恋歌表現

咲本 英恵

はじめに

『風に紅葉』は鎌倉末期から室町期の成立とされる、桂宮本叢書（書陵部所蔵）の孤本である。主人公大将は、才能容姿に恵まれ、仏教的罪となる執心を持たない人物として登場し、妻・一品宮のほか今上帝女御や太政大臣の妻、故異母兄の息子との恋を楽しんでいる。

従来、主人公の性格や登場人物たちの罪悪感のない不倫行為、少年愛（男色）などが「退廃的」「耽奇的」と批判的に評価されてきた¹⁾が、近年そのような批判の対象となった要素を、作者の意図として評価する積極的な見方が提出された²⁾。

物語冒頭、語り手は以下のように物語創作への意気込みを語る。

風に紅葉の散る時は、さらでもものがなしきならひと言ひおけるを、まいて老いの涙の袖の時雨は晴れ間なく、(略) 問はず語りせましき心のみぞ出でくる。その中に、なべて物語などに言ひ続けたる人には変はりて、艶にしみじうもあらず、波の騒ぎに風静かならぬ世のことわりを思ひ知るかとすれど、それも立ち返りがちに、よろづにつけて心得ぬ人の上をぞ案じ出だしたる、あまり聞き所なきは、昔にはあらぬなんめり。(P8)
つまり作者は、「よろづにつけて心得

ぬ人」の「昔にはあらぬ」物語を作ろうとした。

中世王朝物語全集の注釈によれば、『風に紅葉』の引き歌・引用・典拠等の6割が10世紀～院政期までの歌集・物語から摂取されていることが分かる。したがって『風に紅葉』作者が指す「昔」をその時代の文学作品と想定するならば、本作品はそこからの逸脱を敢えて行った作品と言ってよいだろう。では『風に紅葉』は「昔」のどの部分を対象化し、そのことによって「昔」の何を打破し乗り越えようとしているのだろうか。

本稿では、『風に紅葉』と「昔」との差異を、主人公大将と二人の女御との恋の贈答歌に求め、中世王朝物語史における『風に紅葉』の新たな位置づけを試みる。

1. 梅壺女御について

次は、梅壺女御と大将の初めての和歌贈答場面である。

(岩清水の臨時の祭りからの) 還立、夜に入りてあるに、過ぎ給ふ御簾のうちより御袖をひかへて、いささかなるものを御手に入るを、さすが落とさじと引きそばめて見給へば、

①いろいろの挿頭の花もなにならず君がにほひにうつる心は
片仮名に、なべてならぬ書きざまなり。(略)

②春ごとに挿頭の花はにほへども
うつる心は色やかはらむ
と書いて伝へさせきこえ給へば、(梅
壺は)心もそらにて、いまだ寝給はざ
りけるに、よろしう待ち見給はんや。

③「年を経て心の色はそめませど
色に出でねばかひなかりけり
繁さまされど」

なんどやありけん。(p13~23)

①③は梅壺女御、②は大将の詠歌である。

1.1 「うつる」「心」という表現

①歌は、「色々な挿頭の花(を挿した男)
もなんということもない。あなたの照り
輝くような美しさに、(帝という夫があ
りながら)あなたに移ってゆく、私の心
にとっては」と解釈できる。女御が自
らの浮気心を出し、贈った恋歌である。

二十一代集中、「うつる」「心」を詠んだ
恋歌は全89首³⁾。うち、詞書によって恋
の場面で詠まれたことがわかり、相手に
心が惹かれる・心移りしていくという意
味で詠まれている歌は5首ある。以下に
例を示す(特に断りの無い限り、和歌は
全て『新編国歌大観』に拠る)。

[1] 花見れば心さへにぞうつりける色
には出でじ人もこそ知れ(古今集・
春歌上・104・移ろへる花を見て、
よめる・躬恒)

[2] 菊の花うつる心をおくしもにか
へりぬべくもおもほゆるかな(後撰
集・恋四・852・わすれ侍りにける
女につかはしける・よみ人しらず)

5首のうち、女が自分の心変わりを詠む
例は無く、室町時代の私家集にも同様の
歌は見えない。このことから、「うつる」
「心」は恋歌においては男性特有のもの

であり、梅壺女御は男性的恋歌表現に
よって大将に思いを伝えたと言える。

1.2 「色に出づ」という表現

梅壺女御の③歌にも、実は同様の趣向
が認められる。③歌は「年月を経て、私の
あなたへの恋心の色はどんどん濃く染
まってくれけど、表にあらわれなければ
甲斐のないことでした」という恋心表
出の贈歌である。辛島(2004)は③歌に
以下の兼宗の歌の影響を指摘する。

人知れぬ思ひは深くそむれども色に
出でねばかひなかりけり(『続千載
集』恋一・1015・前大納言兼宗)

駒木(1976)によれば、「色に出づ」は
「忍恋」を表出することを意味する表現
であり、後藤(1992)は「忍恋」を男性的
恋歌表現であると指摘している⁴⁾。

二十一代集中、「色に出づ」表現を用い
た恋歌は全96首。以下はその例だが、詞
書から男のものとして詠んだと判断でき
るものは9首、女のものとして詠まれた
歌は1首である。

[3] 色にいでて恋すてふ名ぞたちぬ
べき涙にそむる袖のこければ(後撰
集・恋一・580・人につかはしけ
る・よみ人しらず(白川切では詠者
を「ただみね」とする)

[4] 身にしみて思ふ心の年ふればつひ
に色にもいでぬべきかな(拾遺集・
恋一・633・まさただがむすめに
いはじめ侍りける、侍従に侍りける
時・権中納言敦忠)

『源氏物語』や中世王朝物語においては、
恋心の表出を意味する「色に出づ」が女
のものとして詠まれた例は無く、室町期
の私家集では同様の歌は以下の1首で、

女の恋心は表にあらわれない、という否定の意味で詠まれる。

〔5〕紫の色にいでずはそれと見じいと
どへだつる宿のむかしを（雲玉集・
120・女の夢に返しける歌・納叟馴
窓・左注：杜若のせいの歌なり、こ
れより女を杜若といふ事あり）

以上を踏まえれば、梅壺女御の①③歌は、男性的恋歌表現を用いた、女性としては異例の恋歌であると言える。従来、女の恋の贈答歌には男の言い分や態度を切り返す「型」があり⁵⁾、また、純粋に男を恋う歌は身分の低い女性（女房階級）が詠むものであることが指摘されている⁶⁾が、女御の①歌は積極的に恋心を訴える恋歌であり、むしろ大将の②歌が①歌に対する切り返しになっている。

つまり贈答歌において男女の役割は入れかわっているものであり、しかも梅壺女御は、「女御」という身分でありながら積極的に恋心を詠みかける点で、恋の贈答歌における性差による規範だけでなく、社会（身分）的規範をも越えている。

1.3 梅壺女御の人物像

ではなぜ、梅壺女御はこのような和歌を詠むのであろうか。人物像とのかかわりから考察してみたい。以下⑧は語り手による梅壺女御評、⑨⑩は垣間見する大将の目が捉えた女御像である。

このほど、（大将が太政大臣北の方に逢うために）かく渡り給ふよし（梅壺女御が）聞き給ふに、心も心ならず、（宮中を）急ぎ出で給ひてけり。殿のうちのやう癖々しからず、⑧あまりなるまで直面にて、継母の上とも、いつとなう一つにのみ戯れきこ

え給ふほどに（略） 去年の臨時の祭りの還立に、かかることなんしたりし、心まどひなども語りきこえ給ふ。（略：大将が邸内を垣間見すると）奥の方に、樺桜にや、夜目にはけぢめ見えぬ衣どもに、紅の単衣、山吹の小桂着て、琵琶弾き給ふは、梅壺なんめり。⑨まみおしのべ、なかもりにて、唐絵に描きたる女の団扇持ちたるにぞ似給へる。⑩もてなし、けはひは、おれかへり、若びて見え給ふぞ、見る目には違ひてうけられぬ。（p20～21）

以上によれば、梅壺女御は継母に男性関係を打ち明けられるくらい、あけすけな性格（⑧）であり、切れ長の目、高い鼻、異国風の顔立ちをしている（⑨）。しぐさや雰囲気は「おれかへり、若びて」とされる（⑩）が、『源氏物語』以降の物語において、同じく女性を「おる」と表現するのは、以下のような場合である。

〔6〕昨日の女房たちも、「げに春の色はえおとさせたまふまかりけり」と花におれつつ聞こえあへり。（『源氏物語』③胡蝶・p172）

〔7〕例の、宮の君参り給へれば、碁盤召して御碁など打たせ給ふに、大臣は見所し給ひつつ、何とやらん、石取り隠し、なにかと、いつかたの御ためもよからぬことのみし給ふを、宮の君は、おれかへり笑ひそばれ給ふに、（略）（『いはでしのぶ』巻一・p252～25、但し別記傍注を本文に取り込み、適宜漢字に改めてある。）

〔6〕は、秋好中宮と紫の上が秋春優劣論を和歌で交わす著名な場面の一部で、春を良しとする紫の上から贈られた桜花を

見た中宮方の女房が、自分が「秋を好む」中宮方の女房であるという立場を忘れて口々に花の美しさを言い合っている。〔7〕は、一品宮と宮の君（女房）が囲碁をする場面で、見証役の大臣が碁石を隠すなどいたずらをするため、宮の君が笑い転がっている。「おる」は辞書的には「愚か」と解釈されるが、こと女性に対しては、女房階級の、高貴さの欠けた点を表す語となっている。したがって『風に紅葉』の梅壺女御に対する「おれかへり」という語は、大將が梅壺女御を、身分の低い女のように感じていることを示していよう。

梅壺女御は、男性的恋歌表現によって積極的に自分の恋心を打ち明けたが、そのことは、開放的で幼く、身分の低い女に見える女御の性質と結びついている。また①歌は片仮名で書かれているが、和歌の片仮名表記は男性的表記であり⁷⁾、和歌の男性的恋歌表現を演出する。

さて、このような人物は物語史に殆ど見られず、特に⑩で語られるような身分に相応しくない女性の内面は、男性（世間）から批判的に見られるものであったが、『風に紅葉』において、梅壺女御は帝に寵愛され中宮となる人物であり、大將は梅壺女御が中宮となって以降も、加行のため暇乞いをするまで男女関係を続ける。梅壺女御は、例えば『源氏物語』源典侍や『浅茅が露』の兵部卿宮の大君のように、高い身分でありながら積極的に恋歌を詠みかけて男性に疎んじられる女性とは異なり、魅力的な女性として物語に存在する、物語史上異例の高貴な女君なのである。ここで『風に紅葉』は、先行作品からも逸脱する女性をヒロインの一人として描いているのである。

2. 承香殿女御について

次に、承香殿女御と大將の初めての恋の贈答と逢瀬の場面を見ていく。

またそのころ、承香殿と聞こゆるは、故式部卿宮の女御ぞかし。（略）父親王、才かしこう優れ給へりける。また御子もなくて、この女御に、世にありがたき文どもも、さながら御倉町にとりおきて、奉り給へりけるほどに、帝をはじめ奉りて、なにくれの文・日記ども、ただこの女御に尋ねきこえさせ給ふことなるに、大將、おぼつかなくおぼす文ありて、（略：女御に手元の漢籍を見せてほしいと手紙を送ると、女御は）「文どもはさることにて、ことなる秘事、御みづからならでは」とて、（略）

④書き付くる昔の跡のなかりせば
思ふ心は知らせましやは

また、
いかにせん見るに苦しき君ゆ糸
に心は身にも添はずなりゆく
（略）

四月の十日あまり、山時鳥のしのび音あらはれて、艶なる夕暮れのほど、一条わたりの古宮の御跡へおはしけり。（略）

⑤「しのぶるか雲のよそなる時鳥
音にあらはれていまは聞かばや
思ふてふこともたがひに晴るけ侍
らんこそ」

と聞こえ給へる御気色など、言ふもなかなかなり。

⑥語らば雲居はよそになりぬと
も君があたりに声や尽くさん
（p25～29）

2.1 「思」を「知らず」という表現

④は「古い書を持っていなければ、あなたを想う恋心を伝えることができたでしょうか、いいえできませんでした」という承香殿女御の恋心表出の贈歌である。

二十一代集において「思」(=^{おもひ}恋しいと
思っていること)を「知らず」という歌は全67首。うち詞書から、相手に恋心を知らせたいとする歌であると判断できるのは9首で、それらは全て男性による詠歌である。以下はその例である。

- [8] ほのかにもしらせてしかなはるが
すみかすみのうちに^{おもひ}心を(後
拾遺集・恋一・604・東宮とまうし
けるとき故内侍のかみのもとにはじ
めてつかはしける・後朱雀院御製)
- [9] われひとり思へばくるし限なき
心をいでやかけてしらせん(新千載
集・恋一・1014・はじめて人につ
かはしける・西宮左大臣)

室町期の私家集において同様の歌は無いことから、承香殿女御の④歌に男性的恋歌表現を読み取ってよいと考える。なお、「思」を「知らず」という表現は、中世王朝物語では『夢の通ひ路物語』において女房(中将御許)の詠歌1首「君にさはいつかしらせんおもひ川底のみくづと我はきゆとも」(p94)が見えるのみである⁸⁾。この歌は、好意を抱いている宮の中將に袖を掴まれた時、中将御許が差し出した扇に書かれてあったものであり、宮中將はこの扇を奪って返歌もせずに帰っていく。既に第1節-2で言及したとおり、純粹に男を恋う歌は身分の低い女性が詠むものであり、中将將御許はその例に漏れない。その意味で、承香殿女御の④歌は、和歌表現における性差的規範だけでな

く、社会(身分)的規範をも逸脱した恋歌と捉えられる。

2.2 「ほととぎす」が鳴くという表現

次に⑤歌に注目したい。⑤は大將が、宮中を退出してきた承香殿女御を「雲居の外のほととぎす」に喩え、こっそりではなく、今こそ声に出してはっきりと恋心を聞きたい、と挑発する歌である。それに対し、承香殿女御は⑥で、あなたと恋を語り合ったならば宮中には居られなくなるでしょう。それでもわたしはあなたのそばでこの恋心を、声が出なくなるまで訴えましょう、と返歌する。

⑤⑥の贈答歌には、以下に挙げる『蜻蛉日記』の贈答歌が影響していよう。

音にのみ聞けばかなしな^{ほととぎす}
ことかたらはむと思ふころあり
【兼家】

かたらはむ人なき里にほととぎすか
ひなかるべき^{声なふるしそ}【道綱母】
(『蜻蛉日記』p90~91)

兼家は、婚前、未だ姿を見たことのない道綱母をほととぎすに喩え、「評判だけ聞いているのは悲しい、あなたと語り合いたい」という恋歌を贈る。それに対し道綱母は、ほととぎすを兼家に喩え返し、「語り合う人など居ないこの里で、甲斐もなく声を鳴きふるしてしまうな」と切り返しの歌を詠む。『風に紅葉』は上記の『蜻蛉日記』の贈答場面を引用しつつ、女の詠歌内容を逆転させているのである。「ほととぎす」が声を「尽くす」という歌は、『新編国歌大観』全体で10首(12例)見ることができるが、その中に恋歌はなく、室町期の私家集においても同様の歌は無い。

そこで二十一代集に、「ほととぎす」が「鳴く」という表現を持つ歌を求めたところ、全517首中、詞書から恋の場面と判断でき、「ほととぎす」が男を比喻する歌は15首、女を比喻する歌は4首見られた。『風に紅葉』では、ほととぎすは承香殿女御を比喻している。そこで、ここでは特に、女をほととぎすに喩えた歌に注目したい⁹⁾。

[10] とふ程のはるけき山のほととぎすなくをも人はきかずやあるべき
(玉葉集・恋四・1424・御返し・女御藤原能子)

[11] さとにのみなきわたるなる郭公
わが待つときはなどかつれなき(玉葉集・恋四・1622・斎宮女御さとにひさしく侍りけるころ、五月になりてつかはさせ給ける・天曆御製)

[10] は、「くるほどのひさしきからに思ひやるかたさへなくもなりぬべきかな(三条右大臣のむすめの女御にたまわせける・延喜御製)」という男性贈歌に対し、「声を聞きたければあなたが聞きに來ればよい」と切り返す女性詠歌であり、[11] は、ほととぎすが鳴きに來てくれないのを残念に思う男性詠歌である。室町期の私家集に、「ほととぎす」が「鳴く」ことを女性の恋心表出の行為に喩えた歌はない。つまり「ほととぎす」が「鳴く」という表現を用いて積極的に恋心を訴える女性詠歌は無いのである。中世王朝物語における「ほととぎす」が「鳴く」という恋歌においても同様のことが指摘できる。

以上より、承香殿女御は先行物語や従来女性の恋歌を踏襲せず、男性的恋歌表現を用いて大将に恋心を伝えていると言える。

2.3 承香殿女御の人物像

ではなぜ、承香殿女御はこのような和歌を詠むのだろうか。ここでも人物像に照らし合わせて考えてみたい。

第2節引用文の波線部のとおり、承香殿女御は学才ある父から大量の「文ども」を相続し、漢籍や日記について帝たちから尋ねられるほど知的な女性である。このように、男性と対等、それ以上の知識を有する女性は、一条院皇后定子をはじめ歴史的には賞賛されてきたが、『源氏物語』の「博士の女」に代表されるように、物語史においては烏滸者扱いを受けた。だが、『風に紅葉』は承香殿女御を烏滸者ではなく、男性から愛される女性として描いた。以下は大将が捉えた承香殿女御の姿である。

⑪言ひ知らず艶なる御気色は、をかしう見きこえ給へど、逢瀬待たれし水荳の跡、人の御ほどのおしはかられしほどの、近まざりにはおぼえ給はず。⑫人柄のらうらうじく、優にいみじくおはする人の御ほどによれば、心づくしなるべき行く末の、なかなかの嘆きをも、浅からず聞こえ給ひながら、暁まではつつましきさまにもてなして、例の宵過ぐるほどにぞ出で給ひぬる。(p29)

承香殿女御は優美さや雰囲気は素晴らしいが筆跡や身分から期待していたほどの美人ではない(⑪)。だが洗練され上品で、人柄が素晴らしく(⑫)、大将は今後、承香殿女御ゆえにもの思いすることを予感している。こうした女御の魅力は、「御色好み」の帝が、「承香殿の女御は、一際よしある方には思ひきこえさせ給へれば」(p30)と、妻達の中でも格別に承香殿女

御を寵愛する理由でもあろう。大將も、承香殿女御を最愛の女君としないまでも、関係を続けていく。

『風に紅葉』作者は、承香殿女御の知性を美点として描き、物語史における新しいヒロイン像をつくった。承香殿女御の男性的詠歌は、知的分野で男性と対等に渡り合うことのできる女御の人物像に深く関わっている。

3. まとめと展望

第1、2節において、『風に紅葉』における二人の女御の恋歌表現を、先行・同時代の勅撰集、物語と比較した。

第1節では、梅壺女御の恋歌における「うつる」「心」、「色に出づ」という表現が男性的恋歌表現にあたるものであること、それが梅壺女御の女御らしからぬ開放的な性格と結びついていることを明らかにした。

第2節では、承香殿女御の「思」を「知らず」という表現や「ほととぎす」が鳴くという表現が、やはり男性的恋歌表現であり、それは漢籍・日記など男性的教養豊かな女御の人物像と結びついていることを明らかにした。

『風に紅葉』は、男性的表現を用いて恋心を訴える高貴な女性を新たなヒロイン像として提案した。つまり「昔」を対象化した作者は、心情を押し込める女性、すなわち「昔」が繰り返し描いた理想の女性像を打破しようとしているのである。その意味で、『風に紅葉』は社会的規範を切り崩そうとする文学の一端として捉えることができるのではないだろうか。さらに本稿第1、2節より、二人の女御が和歌表現において男性的立場を獲得して

いると捉えるならば、『風に紅葉』は社会的・文化的な男女の性差を意識した作品と捉えることも可能であり、その観点から、『風に紅葉』を中世という時代の中で捉え直すことができると考える。以下に今後の課題として見通しを述べる。

中世王朝物語には、例えば『在明の別』『とりかへばや』『わが身にたどる姫君』のように、男女の入れ替わり（社会的性差の逆転）を描いた物語がある。また、『しのびね』『岩清水物語』『海人の刈藻』などは、女性が社会的栄達を遂げる一方で男性が出家し恋物語の舞台から退場していくという話の型を持つが、中世王朝物語に特徴的なこの話型（いわゆる「しのびね型」とか「悲恋遁世譚」と呼ばれるもの）は、王朝物語の男女と生き方が逆転している。さらに、同性愛を描いた物語として『岩清水物語』『わが身にたどる姫君』がある。中世はこのような、様々な形で性差とは何かということを問題にしたのであり、これらの文学作品と同質の問題意識を、『風に紅葉』の二人の女御による恋歌のあり方にも見ることができると考える。そして、なかでも注目したいのは、『風に紅葉』以外の中世王朝物語においては、登場人物たちの恋の贈答歌の和歌表現は、社会的性差とほぼ矛盾しないことである。

例えば『在明の別れ』の女右大將（男と偽り大將になっている女性）は、「三条の女」に対し「袖かけて折りも見てまし梅の花人の標結ふかざしならずは」（p29）と恋歌を贈る。相手の女性を「梅の花」に見立て、「折りたい」、つまりあなたと逢いたいと伝えるこの歌は、女右大將の社会的立場すなわち男性の表現を持つ。

反対に、女の立場で帝と後朝の歌を交わす時は、「身の世語りになりや果てなん」(p79) と、自らの憂いを詠み上げるような内省的な歌(いわゆる女歌)を詠む。

紙幅の都合上、部分的にしか触れられないが、このような和歌の傾向は、同じく男女の入れ替わりを描く『とりかへばや』や『わが身にたどる姫君』にも見られる¹⁰⁾。加えて、悲恋遁世譚における男女の恋の贈答歌にこのような特異な例は見出せないこと、また、同性愛間では和歌の贈答が成立しないことなどから、恋の贈答歌の表現が、先に挙げたような性差の逆転を物語の素材とする物語においてでさえ、「型」に縛られやすいものであったことが思量されてくる。

そのように見た時、『風に紅葉』は性差を問題にした中世王朝物語の作品群の一つであり、しかも規範性の強い和歌表現においてその問題に果敢に取り組んだ特異な物語として、中世王朝物語史に位置づけられるのである。

【注】

- 1) 『風に紅葉』を退廃的と評する先行研究に市古貞次(1959)、小木喬(1961)、樋口芳麻呂(1966)などがある。また、神田龍身(1986、1992)は、大将と男色関係にある若君に注目し、大将の分身のような存在であったはずの若君が次第に本物(大将)にとってかわっていく物語の構造に、倒錯愛による家庭崩壊のテーマを読み取る。
- 2) 例えば河野千穂(1998)は、『狭衣物語』と『風に紅葉』の構想・設定等の類似に対し、主人公像の相違が甚だしいことを指摘し、「伝統的な主人公を越え

る主人公を描くことが、『風に紅葉』の作者の意図であった」と論じている。

- 3) 勅撰集で用例を調査する際に、院政期以降の勅撰集には題詠歌が多く、用例が採取しにくいという特徴があった。題詠歌であれば、実質的に関係なく和歌を詠むことができる。『風に紅葉』が中世に成立した物語である以上、女性が男性的和歌表現を用いることを題詠歌の流行に結びつけて考えることも可能だが、女性の男性的恋歌表現が題詠歌でしか(ほぼ)現れないという現象は、題詠でなければ和歌表現における性差による恋歌表現の型を乗り越えにくいことを示しており、和歌の型の規制の強さが思量される。物語和歌は、物語に寄り添うものであり、詠者を含めた物語の内容そのものが歌の題である。したがって、本稿が検証する和歌について、題詠歌を用例とすることはしない。

- 4) 駒木敏(1976)は、「色に出でて言ふ」には、「(心の中で) 恋ふ」が対置されており、『古今集』の配列の中では、「色に出づ」は「『忍ぶ恋』のテーマのもとに一連をなす」とする。また、後藤祥子(1992)は、式子内親王「玉の緒よ絶えなば絶えねながらへばしのぶることも弱りもぞする」の先蹤を、百人一首38番「浅茅生の小野の篠原しのぶれどあまりてなどか人の恋しき(参議等)」や39番「しのぶれど色に出にけり我恋は物や思ふと人の問ふまで(平兼盛)」に求め、式子の詠歌も「男性の『忍恋』の思いであって女の歌ではない」とする。また「こと平安和歌の現存資料に関するかぎり、『忍恋』は原則として男性の

側のものという印象は拭えない」と論じている。

- 5) 折口信夫(1996)は男の訴えを「拒絶」し「対抗」する歌を女の歌の型とし、古代歌垣の男女の「かけあひ」に、その型の源流を見る。この折口説を受け、鈴木日出男(1990)は男の恋慕の歌に対し、それを素直に受け入れたり自らの恋慕を訴え返したりするのではなく、男の言葉や態度に対する何らかの「反発の発想」を詠むことを「切り返し」と表現し、そのような型を踏襲した歌を「女歌」と呼んだ。鈴木によれば、「贈歌であっても相手をたしなめるような否定的な契機をはら」む歌や、「相手の非を難ずる発想」が「自らにも向けられ」、あるいは「相手と自分の関係が否定的に捉え直され」た結果「内省的とな」っている歌も「女歌」の一つの型である。
- 6) 前掲[4] 後藤論文は、「限りなく高貴な相手に対」する恋こそ「女の側から恋してよい唯一の場合」ととし、「(逢った後の後悔や怨みにことよせて関係の継続を迫る体の女歌を除外すると) 純粋に『人を恋う』という主題の恋歌は、男性の恋歌か、貴顕に憧れる女歌が原則」であるとする。
- 7) 王朝・中世王朝物語において、女性による片仮名和歌は、他に『虫めづる姫君』の按察大納言娘と、『夜寝覚物語』の妹姫君、『兵部卿物語』の女君(按察大納言娘)の詠歌以外に見出せない。『虫めづる姫君』の「片仮名」に対し、新潮日本古典集成は「普通は、男子が漢字とともに使用する」、「男性的教養」(頭注六)と注記し、新日本古典文学大系は「この姫君、強引に男の躰を先取

りしていたとも考えられよう」(p25)と評する。坪井美樹(1996)は和歌第四句の同音異義語を用いた掛詞に注目し、姫君の用いた片仮名は、規範的片仮名を習得していないために書き得た不完全な仮名を意味するとするが、男性的振舞をする高貴な姫君の滑稽さを描くという物語の趣向を考えれば、片仮名には男性らしさを演出する意味があると考えたい。但し坪井の指摘するように、片仮名和歌には仏教や即興性との関連などの問題も残されている。

- 8) 『風葉和歌集』には、ほかに散逸物語の男性詠歌「世のつねのことはぞとやいひなさんいかでしらせんおもふ心を」(恋一・761・女にはじめてつかはしける・とこなかの関白)がある。
- 9) ほととぎすが女を比喻する歌は、ほかに、[11] に対する斎宮徽子女御の返歌「ほととぎすなきてのみふるこゑをだにきかぬ人こそつれなかりけれ」(玉葉集・恋四・1623・御返し)と、「いかでかく思ふ心をほととぎす夜ぶかくなきてきかせやはせぬ」(新続古集・夏・263・五月ばかりに徽子女御のもとに仰事ありける・天曆御製)が見うけられるのみである。斎宮徽子女御の詠歌は[10]の能子詠と同趣向の、切り返しの歌であり、天曆御製は[11]と同様、声を聞かせてくれないほととぎす(女)への恨みの歌である。
- 10) 例えば『とりかへばや』の女中納言による吉野姉宮への贈歌「今の間もおぼつかなきを立ち返り折りても見ばや白菊の花」(p78)は『在明の別』の女右大将の歌と同趣向である。また『わが身にたどる姫君』の女帝による夫三条院

への後朝の歌「やすらひに出づるも惜しき真木の戸に幾夜有明の月が残らむ」(p52)の傍線部は、恋人のもとに通う男性が詠むに相応しい恋歌と言え、その表現には彼女の帝という社会的立場が関わっていると考えられる。

【引用テキスト】

- 『風に紅葉』中西健治・常盤井和子校訂・訳『風に紅葉 むぐら』中世王朝物語全集、笠間書院、2001
- 『海人の刈藻』妹尾好信校訂・訳『海人の刈藻』中世王朝物語全集、笠間書院、1995
- 『在明の別』大槻修、桜楓社、1970
- 『いはでしのぶ物語』小木喬『いはでしのぶ物語：本文と研究』笠間書院、1977
- 『蜻蛉日記』鈴木正中・伊牟田経久校注・訳『蜻蛉日記』新編日本古典文学全集、小学館、2008
- 『源氏物語』阿部秋生ほか校注・訳『源氏物語③』新編日本古典文学全集、小学館、1996
- 「虫めづる姫君」塚原鉄雄校注『堤中納言物語』新潮日本古典集成、新潮社、1983
- 「虫めづる姫君」大槻修ほか校注『堤中納言物語・とりかへばや物語』新日本文学大系、岩波書店、1992
- 『夢の通ひ路物語』工藤進思郎ほか編、福武書店、1975
- 『わが身にたどる姫君』片岡利博校訂・訳『わが身にたどる姫君・下』中世王朝物語全集、笠間書院、2010

【参考文献】

市古貞次 (1959) 「「かぜに紅葉」について

- て」『史学文学』2巻2号
- 小木喬 (1961) 『鎌倉時代物語の研究』東宝書房
- 折口信夫 (1996) 『折口信夫全集13』中央公論社 (初出 (1916) 「女流短歌史」『婦人公論』1-7・8)
- 辛島正雄 (2004) 「校注『風に紅葉』 一巻一」『文学論輯』36
- 河野千穂 (1998) 「『風に紅葉』における『狭衣物語』の影響—対極する男主人公—」『甲南国文』45
- 神田龍身 (1986) 「『かぜに紅葉』考」『今井卓爾博士喜寿記念 源氏物語とその前後』桜楓社
- 神田龍身 (1992) 「男色、暴力排除の世代交替」『物語文学、その解体—『源氏物語』「宇治十帖」以降—』有精堂
- 後藤祥子 (1992) 「女流による男歌—式子内親王歌への一視点—」関根慶子博士頌賀会編『平安文学論集』風間書房
- 駒木敏 (1976) 「「色に出づ」考——慣用句と発想法——」『萬葉』92
- 鈴木日出男 (1990) 『古代和歌史論』東京大学出版会
- 坪井美樹 (1996) 「〈片仮名〉で書かれた和歌—《虫めづる姫君》の詠んだ和歌をめぐって—」『文芸言語研究言語編』29
- 樋口芳麻呂 (1966) 「風に紅葉の典拠について」『愛知大学国文学』8

付記

本稿は第51回表現学会全国大会での研究発表を加筆修正したものです。会場の皆様および査読の方々から頂きました有益な御助言に、心より感謝申し上げます。

(共立女子大学)